

災害復興と地域資源の活用

— 福岡県西方沖地震の被災地・玄界島住民の語りから —

中野紀和

要 旨

2005年3月20日の福岡県西方沖地震によって全島被災し、わずか3年で現地での復興を遂げた玄界島（福岡県福岡市西区）の住民が、島での生活を取り戻して早くも6年が経つ。

島外への自主避難、仮設生活を経験した島の人々は、島の斜面地の一体整備が進むなかで、ある者は一戸建てに、ある者は県営や市営の集合住宅を選択して島での新たな生活を送っている。これらは福岡市主導のもと、「玄界島復興対策検討委員会」のメンバーを中心として進められた。同委員会は島の従来の社会組織が基盤となっている。

本稿では、同委員会のメンバーを中心に、住民から聞き取りをした、震災以前の生活、震災当日、復興過程に関する語りの一部を提示する。既に復興を終え、日常の暮らしを取り戻した住民たちの語りには直後のような生々しさはない。その分、かつての暮らしと現在の暮らしをどのように位置づけるのか、つながりをどのように見出そうとするのか、その過程が多様な話題を通して語られる。それらを素材として重ねていったときに現れる社会関係や知恵や工夫、指向性をすくいあげる。以前の暮らしを懐かしみつつ、現状のマイナス面も見据えつつ、取捨選択していくなかに社会関係を維持する理由や、新しい空間を住みこなす工夫が浮上する。今なお続く望ましい生活の模索のなかに、地域の生活基盤となる、目には見えない資源を見出すことができる。

1 はじめに

人はどのような生活を望ましいものと捉えているのだろうか。2005年3月20日の福岡県西方沖地震によって、玄界島（福岡県福岡市西区）は全島被災し、3年間の仮設生活を

経て、被災から丸3年という短期間で現地回復型の復興を遂げた島である。その復興のあり方は東日本大震災の復興モデルの一つとされている。この復興経緯の概略については、既に拙稿で中間報告として明らかにしている¹⁾。

本稿では、まず帰島から5年経った時点

での住民の語りの一部を具体的に提示する²⁾。災害復興の調査では被災直後の状況把握に関心が集まりがちであるが、ある程度の復興をなした地域のその後については忘れられがちである。落ち着きを取り戻した現在の生活からこれまでを振り返り、日常を取り戻そうと今なお続けられている工夫や努力の事実を記録することは、物理的復興の後に、次なる段階としてどのような対応が必要であるのかを知る基礎的資料となると考えられる。帰島して5、6年が経過した住民たちの語りに直後のような生々しさ求めるのではなく、時間の経過と共に、体験や記憶をどのように整理してきたのか理解することにまずは努めたい。

高倉浩樹は、「東北大学震災体験記録プロジェクト」の活動をまとめた聞き書きのなかで、「人がいなければ、村や町がなければ、災害とはならない。災害化するのには、自然の外力が人間の暮らしと遭遇するときである。すなわち、災害とは社会システムや文化的価値の文脈の中にこそ、その姿を現す[とうしんろく編2012:23]」と指摘している。玄界島の住民の語りに現れるのは、島の生活と結びついたさまざまな行為の意味付け、知恵や工夫である。それこそが社会システムや文化的価値の文脈であり、生活を支える基盤となっていることがわかる。

聞き取りは、一対一の限られた時間だけでなく、住民が日常的に集まって談笑する場等も含めて、自由な雰囲気の中かで進めていった。全住民から話が聞けたわけでもなければ、話してくれた人も体験や記憶のすべてを語っているわけではない。そういう意味では記憶や体験の断片でしかない。震災を契機とした語りであっても、その内容は膨らみ、想定外

の話題に発展していく。その豊かな語りのなかで記憶や体験の断片は、現在の生活とどうつながっていくのか、すくいあげることに努めたい。録音し、書き起こした分量は、B5の用紙にぎっしりと書き込んだ状態で100枚を超える。これらはまとまった形で公開する必要があると考えているが、まずはその一部を提示したい。

本稿で提示するのは、島の復興計画の中心となった玄界島復興対策検討委員会の下部組織である「復興協議委員会」のメンバーの語りの一部である。さらに、飲食店のない島では、気の合った者同士が家に集まって飲食をしながら談笑する、いわゆる飲み会が頻繁に行われてきたのだが、同様の集まりが現在でもわずかながら残っている。そのような集まりの場での聞き取りの結果も提示するが、紙幅の都合上、地震当日の様子、震災前後の生活の変化を中心としている³⁾。

2 住民の語る島の生活 I

2-1 かつての島

玄界島の新しい宅地の一面に古嶋家はある。長年、郵便局長を務めて退職した古嶋環さん(60代)とその息子の尚樹さん(40代)、妻のゆかりさん(30代)の3人が暮らしている。尚樹さんはかつて漁に出ていたが現在は漁業協同組合に、博多から嫁いできたゆかりさんは、環さんの後を継いで郵便局に勤めている。尚樹さんは復興協議委員会のメンバーでもあった。3人は島の仮設で3年間を過ごし、現在は一戸建てで暮らしている。古嶋家には、社会的で世話好きな環さんを慕い、親戚の人や親しい友人がふらっとやってくる。筆者が島を訪れるとき、泊めて頂くの

はこの古嶋家である。

かつての島の様子は住民の語りからしか知ることができず、その面影は写真のなかにとどめられるだけである。環さんは、島中がブルーシートに覆い尽くされた被災直後の写真を見ながら、島の特徴であった狭い階段の「がんぎ段」の面影を見つけると、がんぎ段ゆえの苦勞を話してくれた。

がんぎ段と家の普請

島は昔、車も通らない階段だったんですよ。家を建てるにしても家族じゃ、とてもできなかった。材木の1本、瓦1枚、人の手で持ってあがるんです。家を建てるにしても、修理するにしてもみんなに手伝いに来ていただくなくちゃいけないんです。だから、家の工賃が1,500万だとしたら、みなさんの昼とおやつ。工賃の1割から2割はそれにかかりました。ごはんを食べさせて、お酒を出して、お茶も出すんですよ。遅くなった時は夜ごはんも。朝の10時のお茶に、ジュースやパンを入れたり。3時のおやつときにはジュースや果物を入れたり。夏場は道の端々に麦茶をバケツに入れて、ひしゃくとコップ。(家を建てるのが)親戚じゃなくても、同じ組の人じゃなくても、関係なく「加勢に行っとこう」。自分の家もなんかあったときには加勢に来てもらわにゃいかん。加勢に行かんと、自分のうちのときに来てもらえないから。共同意識じゃないけど、モヤイって言って、共同作業って感じ。皆がばあっと加勢に行って、またそこで知らない人、知らないっていうんじゃないけど、そんなに親しくない人たちとも仲良くなったりして。お茶をいっしょに飲んだり、ごはんを食べて、隣

同士に座るんですよ。莫蔭をしいて、テーブルを並べて。海岸沿いとか、広い場所に。漁村センターを借りたり。

でも、1カ月中じゃないんですよ。荷物をあげるときは。何回かに分けられますね。(資材を船から)ほとんどあげてしまうんですよ。そうしないと船で運ぶのも大変です。最初に基礎の材料、足組とかです。棟上げのときがまたありますね。一軒のうちに大量に手伝いに来てもらうのは3回ぐらいです。あとはもう親戚でちょこちょこするぐらい。だから、おやつでもちょっと余分にね。(島の)上の方やけん、骨折らせるけん、みんなに。もう道が狭いから。上りはこっちの道で行って、荷物を下ろした人は反対側の道で下りていくって感じでした。

昭和50年頃ですね、本当にもうラッシュみたい。何軒も次々に建ちました。「あちは(夕方)遅うまでしよる、加勢行っとらんとばい」とか言われてましたね。私も自分の家に手伝いを受けてたので、あちこちの家へ手伝いに行っても疲れましたが、楽しくもありました。

生まれ変わった島は宅地用の土地が4段に整地され、まるで住宅展示場のような景観をつくりだしている。島の東西には荷物を運ぶためのモノレールがあり、購買部で購入したコインを入れると動くようになっていたが、すべての家の前まで車が入れるようになった。今ではまったく使う必要がなくなった。

新しい家

本当に便利になって、家の間隔も広くとってるからですね、隣の話し声も聞こえん。

でも、それは良いことであるようで悪いですね。だって、昔は窓を開けたら隣っていう感じだったから。「えらい、まあ昨日は夫婦喧嘩して」って。だから喧嘩も抑える。大きな声を出したくても、ぐっと我慢したりとか。だって、一夜明けたらみんなが知ってる。えらい喧嘩になりよったとか。それが良かったんですね。雨が降っても洗濯物干しとっても安心して出かけました。誰かが取り入れてくれてました。でも、今は各家にインターホンがついとうやないですか。かえって(家に)入れんとですよ。よその家に行くときは鳴らします。なんか悪いような気がして。

鍵はかけてません。でも、市営住宅の人は3分の1は鍵をかけようとうやないかな。県営も。部屋を間違えて入ってくるから。だって、慣れてませんもん、島の人たちは。どこも同じように見えるから。

住む工夫

(市営や県営住宅の人は)玄関に木枠で網戸を作って。一人がしたらみんなが真似して、作ってもらうんですよ。

私たちが仮設住宅のときに入り口を作りましたもん。材木を買ってビニールタンで。もう(家の形が)ストンなんですよ。玄関を開けたら、軒もないから、風向きによって雨が(降りこむので)…。裏口から出たりとか。床に新聞を敷いて靴をおいて。だからちょっと(入口の屋根を)外に出しました。隣のうちと相談して。ちょっとした玄関ができたんですよ。えらい良かったね。雨降りのときなんか、もっと早くしとけばよかったねって言って。ちょっと奥行があるから下駄箱を置いたりもした。一軒

がすると、真似して次々に。

島の集合住宅を注意してみると、夏は引き戸の玄関ドアを少し開け、そこに木枠の網戸をはめ込んでいる家が多いことに気がつく。市営住宅も県営住宅もバリアフリーの設備が施され、海風の強さを考慮して、玄関ドアは引き戸となっている。玄関の網戸は、島の環境を活かした住民の知恵といえる⁴⁾。ただし、同じ造りの部屋が並ぶ大きな建物で、慣れない住民たちが頻繁に家を間違えるという状況もしばらく続いたようである。生活空間を少しでも住みよいものにするために、仮設生活のときも、集合住宅に移ってからそれぞれの工夫がなされていたのだ。

さらに、古嶋家に遊びにやってきた玉川富士彦さん(50代)との会話から、島の苦労話だけでなく、震災以前から博多との関係が次第に強くなっていたことが示される。

環:(震災以前の島の写真をみながら)上までずうっと畑。みんな作ってました。麦と芋。だんだん作る人が高齢化してからもう…、自分の家で食べる程度の野菜を作るくらい。若い人は働きに行くようになりましたね。

富士彦:だんだんとパートが流行ってきて。20年とはいわんなあ、もう30年ぐらいになるよ。一人ずつ、一人行き二人行き、百姓しきらんから向こう(博多)で現金収入って。

昔の人は足腰強いけど、膝が悪い人が多い。上に住んどった人ほど(膝の悪い人が)多い。階段の上り下りをしとうけん。女の人のほうが多い。行きがけにゴミ持って、帰りがけに購買店によって買い物してから

帰ってくる。行きも帰りも手ぶらということとはあんまり見らんようになった、女の人は。

富士彦：ふだん（酒を）呑むのは友だちの家。うちで今から呑もうか、とか。電話してから、刺身のあるけん来んか、とか。一杯やろうか、とか。船で同じ漁をしよる人か、仲の良い人が集まって、自分たちで刺身を作って集まったりしよった。でも、今の人って呑み上手やな。人前で呑まんもんね。人前で酔ったとこ見せんもんね。向こう（博多）で呑みよるかもしれんが。昔の者は酔いよった、道に寝転がって、お宮のお祭りとかあるでしょ。

2-2 復興の試行錯誤

夜になると漁業協同組合の仕事を終えた久保田正一さん（50代）も古嶋家にやってきて、食事をしながら盛り上がることも多い。正一さんは古嶋家とは親戚にあたる。震災当時は消防団員でもあり、住民の自主避難を率先して誘導した一人である。

地震発生から自主避難まで

正一：ちょうど福岡市内のほうに用事があったから行こうって。そうですね、能古島を過ぎてましたね。博多までもの10分ぐらいやったかな、乗り合わせとった客と談笑しよったら、スクリーンが何か物にぶつかったように衝撃が、バンバンバンってなってる。そしたらおさまったんで。そのわりに普通に動きだしたよねって感じで。当時、非番で乗とった船長をしてる人がゴトンゴトンってなったときに、何か異常かっていうのを確認しに行ったんでしょね。

「いや、異常やないよ」って。そしたら、ブリッジにテレビつけとったと思う。パツと出てきて、私たちに言ったんですよ。「あ、これは玄界島の沖が震源で地震が起きとる」って。「いやあ、玄界島で地震があるもんか」って。地震で船にくるなんてまったくそういう体験をしたことないし、聞いたことないから。

私、火災をまず心配しよったんですよ。もう火が燃えて、島がパチパチいうっちゃないかと。だけど、途中で双眼鏡で見ると何も出らんから、今のところ誰もどうもなとらんのじゃなかるうか、と思うとったら、もう港に入るにつれて、島がいつもこういう形やったとに…という頭の中にあるのが無くなるとる。なんかあったかいな、という感じなんですよ。

まず動き出すにしてもなんにしても家族の安否。家族は皆、大丈夫やねって。それから島民の安全確認にまわろうと思って、行く途中の道が石がこけて全部遮断されとうとですよ。これはもう大災害やね、と思うて。そしたら私、ちょうどそのときも消防団員持とったんで消防局から電話があって、「島の状況はどんな」って（きかれた）。もう全半壊ばかりですよって。とてもじゃないけど、この状況じゃ島を離れんと（生活）できんぐらいよって。

そうこうしよる間に余震が続くもんやから、皆がおびえてですね。「これはちょっと島にはおりきらん」っていうような声が出てきたんで、じゃあ、自主的避難っていう形で呼びかけようかって。受け入れ先が

あるかどうか行政で取り合ってもらって、九電体育館がすぐに受け入れOKってことで、海上保安庁の船やら市営渡船やら全部でたんです。結局、それが避難のきっかけ。

あれは全島避難じゃないんですよ、自主避難。行政からこの島を離れろっていう指示は全然出てこん。おそらくそういう状態で、住める家もあろうし、駄目な家もあろうから、もう全部巻き込んだほうがいいですもんね。もう皆出るようにしようかってことで行政と連絡を取り合っ、海上保安庁の船で福岡に行ったり。自主避難は全部。住んどる人全員。順番決めてですね。まず小さな子どもと女性を優先的に出せって。若手とは男衆は最後。

宅地造成をふり返る

尚樹：すごいね、福岡市がしたけんね。集合住宅から土地の整備まで全部。

正一：生々しい言い方になるけど、(土地を一旦手放すことを)認める、あきらめっていうか、そういった部分とそれに対する代償っていうか、そういった部分に納得せんかぎりはね、ダメでしょうね。反対派と賛成派が半々、どっちかっていうと賛成派が多かった。もう交渉交渉で。やっぱり3分の1ぐらいは反対派がおったよ。

富士彦：我が家はよかろうばってん、周りはどうするねって。前はどこも階段。自分の家が途中にあったら、まず道の整備をせないけん。道を整備せんことには家はできんよね。それで、そんなふうの流れがなっていった。

尚樹：場所を選ぶことはできん。あくまで抽選。

正一：住まいは変わっても、やっぱり昔からの場所におりたがる人とか、おるとですよ。

尚樹：ほとんどの宅地の者(一戸建て希望者)は、自分の元の場所に戻りたがったね。

富士彦：一戸建ての者は、アパートに住んどもね、前にここらへんに住んどったけん、ここらへんに住もうとか。前の自宅がそこらへんにあったから、抽選にはずれるかもしれんけど、そこを選んだっていう人がね。

正一：それと、俺は感じるとや。昔は郵便局の前から上る直線の道と、お宮の西側坂か、ここの坂しか(縦の道が)なかったろうが。誰とでも会うって。今、多方面に道がありすぎる。だけん、(人に)会わん。人と顔を合わせても、そのまま終わっていくとか。昔の住宅はこういうふう空調とか整備されてないうちもあったんで、夏には夕涼みとか、そういう部分があったと思うんですよ。でも今は、公営住宅とか全部空調あるし、お年寄りも「いこいの家」に集まってくる人もいるんですけど、なかなか家から出ないっていう人もいまだにいますもんね。

尚樹：隣近所の絆のいちばん強かったときは仮設のときやね。仮設のときはまったく今まで話したことのなかった人と会話しよったもんね。隣になるけん。

正一：島の人はずいぶん、何かに向けて突き進もうというときは力を発揮するとですよ。でも、できてしまったら、そこでトーンダウンしてしまうとですよ。昔は家一軒成すのに材木積みから、身内だけではできんかったですもんね。全員の力を借りんと。今はもうこうなってしまったら車で乗りつけられますもんね。

何も残さない

正一：(地震を示すものは) あんまりきれいにやりすぎてしまう。こういった佇まいの中にも、(記憶を残すような) そういった部分を、今にも壊れそうな家っていうものを周りを囲ってですね。やっぱり、よく言われるとですよ。外部から来た人が。なんかそのときの爪痕っていうか、見たいって。写真とかパネルとか見てもあれなんで。普通、大方のところに行ったら、そういうところを残しとうですもんね。

尚樹：最初は、復興委員会でもその話は出よかったよ。建物かなんか一つ、残しとこうかって。結局、それを見て嫌な記憶を思い出すっていうことで。どこが、どう維持管理していくかっていうことでやめた。話は出とった。仮に個人の家を残すことになっても、個人が嫌がるしね。我が家が残されてさ…。

仮設生活を振り返る

尚樹：あのすべてに手が届く狭さがたまらん。

正一：それこそホーム。こういうことを笑顔で伝えられるわけじゃなか。片方(東北)は亡くなった人がいっぱいおってね。仮設でも一人住まいていう人がおるかもしれんけど、そういう(笑顔になる)日が来ることややっぱり伝えたいよね。(家族を亡くした人に)心を強くって言えんと思う。本人も心の中から忘れることはなからうばってん、生きていくうえでプラスに持っていかなと。良いほうに持っていって、進まんといかんけん。玄界島の住人は少なくともそういったこと、仮設を離れてよかった、ということよりも、仮設がよかった、

ということを大事にしようと思う。

尚樹：うちの仮設はプライベートはまったくなかった。もう朝だろうと夜だろうと、俺が寝とっても裏からガラッと入ってくる。起きとるかあ、ゴンゴンゴン、ガラッて。夏は暑くて、冬寒い。窓がえらく結露する。朝、向いの人が「やっぱりなあ、昨日も遅くまで友だちの来て賑やかやったねえ」って、遠回しにやかましかったって。

正一：盆の仏様まいりは仮設っていうのが3年あったけんね。行く前に見とかんと、仮設の位置はわからん。誰がどこにおるかわからん。やっぱり皆が一樣に来るけん。仮設やったら事前に見とかんと、まったく関係ない家に、「ごめんください、線香あげさせてください」っていうのは失礼ですけんね。

2-3 新しい空間を住みこなす

別の日、夕飯が終わった頃、若い漁師の上田浩之さん(30代)も古嶋家にやってきた。浩之さんは、震災当日、漁の真っ最中であった。

観音様が身代わりに

浩之：海の上。漁に出とった。妹のメールで玄界島が大変なことになとうって。それで知ったと。船は揺れたけど、まさか、と思った。何の揺れかなあ、と思とった。もう帰ってきたらびっくりしたもんね。岸壁についたら1メートルくらい段差がある。海もバスクリンのような、海の色が変わとった。

環：若布切りに行とった人たちが言いよった。島の周りから白い煙があがった、シューッと。畑に行とった人も言いよったね、

地面から白い煙が出てきたって。

富士彦：皆が言いよう。お宮のおかげだろうって。お宮とお観音様が崩れとる。お観音様が皆の身代わりになったっちゃろうって。良いほうにね。お宮もゆがんで壊れとったけんな。お観音様のあたりもな。そういう迷信も良いほうにね。

水神あげをする

尚樹：だいたいが信心深いけん、島は。一般の人からも声のあがりよったもんね。「水神あげせな」って。土地を造成するのに、もともと井戸のあったところを、皆、好まんけんね。「ちゃんとあげてもらわな」っていうことで。共同の井戸は復興委員が立ちあって神主といっしょにまわる。神主っていう拝み屋かな。後々、面倒臭いって、水神。拝み屋さんと復興委員が5、6人で。(水神あげを)してもろうとかな、島の土地を買う人から文句が出るよね。やっぱり田舎は信じとうけん。土地の抽選があったときも、あそこは井戸があったねえ、とか、皆知ととう。そういう話が出よったもん。

業者にも「井戸を埋めるときには瓦を放り込むな」とか。「井戸を瓦で埋めるな」とかね。注文が出よった。たぶん、地元の要望でそれがあがとうけん、福岡市はそれをしとう。福岡市からも担当者が5、6人常駐しとったけん、毎回、復興委員の人と話し合うて。こういう要望があがとうけん、なるべくきいてほしい、って感じで。

土地を買うときも嫌うもん、井戸のあるところっていうのは。気にしよったもんね。「確かあそこは井戸のあったもんね」って、言いよったもんね。でも、造成のときに宅

地にかからんように福岡市はずらしとっちゃもんね。ちょうど道路にくるよるとか、ずらしととう。

うちが出来てすぐのときに、遊びに行こうと思ったら、そこを誰かが通りよう、誰かが通った、誰もおらんとに。その話を俺が誰かにしたら、「おかしかねえ。そこ(古嶋家の宅地)に井戸はなかったはず」って、いきなり言われたもん。その話をしよったら「お前のところには井戸はなかったろうが」って。やっぱりそっちにすぐに結びつける。俺、あんまり知らなかった。井戸の上に家を建てたらいかんとか、水神あげっていうのを知らなかったもん。この復興で初めて知ったもん。

住民が暗黙のうちに共有している知は、非日常の状態が起きた時に意識される。それをすくいあげることができたのは、住民が復興協議委員会であり、福岡市と島とを媒介していたからである。

3 住民の語る島の生活Ⅱ

漁師をしている富士彦さんは、時化で海に出られないときは古嶋家に顔を出すことが多い。子どもが独立して島外にいるため、新しくできた市営住宅に妻のちえみさん(50代)と二人で暮らす。

初めての地震

その日、私は息子の学校に行とった。久留米に。(息子は)寮に入とったから布団を買いに久留米のダイエーにおったら、グラスがガラガラ落ちてきて、生まれて初めての地震。阿蘇山が近いけん、阿蘇

山の噴火かなんかやろうねって言いよつたとよ。布団を買ってタクシーに乗ったら、「なんか福岡のほうが大変みたいですよ」って。長男が休みで家におつたとですよ。胸騒ぎがして、携帯はあるけどつながらん。公衆電話を探すのに1時間くらいかかった。で、「大丈夫?」、「家、半分無くなつとうよ」って。もう大急ぎで帰ってみたら…。船は通いよつたけんね。

家は今の学校の下だったんですよ。半分は全壊。完全に落ちて。息子が寝とつたほうだけが無事。そこだけ家が古かつたけんね。びっくりした。船の中から見えるでしょ。窓から見よつたら、もう赤土。土ばかり見えとつた。家が見えん。もう崩れ落ちてから。岸壁に上がった瞬間、岸壁も1メートル上がったたり下がったり、棧橋のところ。もうびっくりしたですよ。

(震災当日は) 風やったもんね。漁に出ている人は多かつた。無線が入つた。電話は通じんから無線。小呂島に漁に行つとつた人が、たいてい船がそこに行つとんたい。山が揺れて砂煙。揺れたって言いよつた。その瞬間、エンジンがどうかなつた。って思いよつた。って、みんな。船が揺さぶられてゴトゴトゴトゴト。みんなスクリー一見たり、エンジンに何か絡まつたと思つて、見たって言いよつた。

(地震は) 玄界だけはなか、と思いよつたよ。福岡はあつても。福岡は震度1とかニュースが流れるでしょうが、玄界はなんにも揺れたことなか。玄界島って地震のなかとこつて思いよつたよ、今まで。

震災以前から同じ島でも上と下では環境が異なつてた。それまで比較的上のほうに住

んでいた2人は、海岸近くの市営住宅に住み始めたときに快適さと不快さの両方を知ることになった。

ちえみ：今まで私たち、家が上の方だったから、風は経験なかつた。だからすっごい、何この風、みたいな。

富士彦：家の向きによつてね。前は、隣が山で、ちょっと引込んだところに家があつたからね。

ちえみ：下の方ってこんなに風が強いのか。潮風とかも。なんか最初は気になってました。洗濯物は前の家があるから、そこまで潮風にあたらぬ。見晴しは悪いけど。

富士彦：一長一短ですよ、海は見えんけどね。

ちえみ：最初は窮屈やつた。見晴しが悪いけん。慣れるまで…。まだ慣れてないけど。まあ、2、3年はうわーって感じやつた。それに自分たちの庭とかないじゃないですか。前は土地があつて花を植えて。それが一番…こころへんはね、ちょっと空き地があるんですよ。そこを借りて作りたいね。でも、やっぱり育ちにくい。花とか植えてるじゃないですか、鉢だし育ちにくい。家から残つてるものを持ってきてるんですけど、枯れました。潮風と環境が変わつて。やっぱりあるんですよ。潮風に強いのと。仮設に持ってきたときも違つたもん。(仮設は) 一番海側やつた。風も波もね。

富士彦：もう昨日みたいな波があつたら、波がドーンできたら、ユサユサ揺れて、あ、地震かなつて言つて。

ちえみ：音もすごいんですよ。潮風が直接来るからね。そういうときは植物に潮がかかるからね、枯れやすい。ここに入ってね、

2年ぐらいはね、私は仮の家みたいな感じで過ごしてましたよ。自分のうちだけど、なんか落ち着かない。仮の家みたいな感じやった、精神的に。地震からこっちは生活パターンが変わりましたね。近所づきあいとか、前は家と家が近くて開けっ放し。声をかけあったりとか、集まったりしてたんですけど、今はもうアパートとか仕事に行く人も多くなって、前より交流がなくなってるみたい。アパートに入ってからやっぱりそういうのは増えたかな。

富士彦：仮設の暮らしからこっち。(隣の)音が聞こえたりって言いよったでしょ。あれからこっち、変に遠慮するようになったよね。

ちえみ：前は近所は顔見知りやないですか。ここに引っ越ししてから全然違う人たちといっしょになって。仲良くなればいいけど、挨拶だけで終わったりとか。前に住んでいた近所の人たちと会ったら、久しぶりって感じなんですよ。お年寄りが一番言います。やっぱり何かあったらね、小さい時からいっしょやったからね。

本土は便利

ちえみ：私たちの世代(昭和30年代生)まではですね、何をするにも親のことを優先したけど、今はね、親は親、そういうのが多いです。

富士彦：(本土の仮設)かもめ広場からこっち、なおさら変わった。でも、だんなさんが漁をしょったら戻ってくる。学校が復活したからやっぱり帰ってこんといかんもんね。向こうは物価も安いしね。自転車で安い物を買に行かれるでしょうが。だけん、酒飲みは夜遊びに行くけどね。

ちえみ：そういうのがまた楽しいよね。親がおったら、親の目って気にしなくちゃいけないし。

漁師は海でも助け合う

富士彦：(島で)何かをするからちょっと集まってくれてと言われても、サラリーマンの人は来んていうか。漁師は嫌々ながらもせないかんやろうね。漁に行って、もし何かスクリューに絡まって、近くにいる船に玄界まで引張ってくれとか。電話でちょっと引張りに来ちゃれ、とか。近くにいる船を招いてとかね。

ちえみ：お互いにそんなんして助け合わないといかんというのがあるけんね。自分たちがいつお世話になるかわからんからね。

富士彦：(地震を経験して)地域が狭いけん、もう何事もいっしょって思っとうけん、かえって気も楽になっとうかかもしれん。

ちえみ：そうねえ、もう仕方ない、という思いはあるみたい。玄界は福岡が近いじゃないですか。順応性がね。しょっちゅう行き来してるから、そういうの慣れてるっていうか、新しいものにあれ(慣れ)しても、悪いものは切り捨てていかなっていう感じで。

2人の会話には、島の住民全員が同じ経験をしているからこそ苦難を乗り越えたという一枚岩のような意識もあれば、その一方では、日常生活の細かな場面では、以前のつきあいを懐かしむ思いが共存している。漁業とサラリーマンといった生業の相違に起因する行動の違いもことあるごとに感じている。この漁師の相互扶助は、がんぎ段ゆえの住民同士の相互扶助と重なって、濃密な関係を作りあげ

てきたのだ。

4 住民の語る島の生活Ⅲ

保育園園長である松田ゆかりさん（50代）は、九電体育館に避難している間も、臨時に保育園を開設し、子どもたちの面倒をみた。復興に際しても、復興協議委員会の委員として積極的に活動した一人である。子どもは独立して島外で生活し、漁師の夫と共に島に戻っている。

地震のとき

（地震のとき）私は自宅に。家は神社の近くだったんですよね。うちは建てて8年目だったので家はなんともなかったんですが、石段や石垣に道や家が建っていたので、周りが落ちてきてますよね。地震のときはぐわっと持ちあがった、と思ったらドンと落ちて。ドンと音がしてから横揺れが続いたんですね。一応、小学校と公民館が避難場所になってます。地震イコール津波っていう予報があるんですけども。私たちは小さい頃から博多湾に（対して）南西に面しているので、津波はくることはないって言われていたので、私は学校のほうには登らなくて、2階の窓を開けて何があっても大丈夫のように、そのまま落ちることがあったら2階の窓から逃げればいいなっていうことで。初めてですよ。まさか福岡に起こるとは思ってなかったのだ。

まずは住民の安全確認

小呂島のへんで、ちょうどヤズが釣れる時期で、みなさん小呂島のほうで（漁をしていた）。で、小呂島がですね、なんかこ

う水煙じゃないけど音がして、一瞬、小呂島が沈んだ感じに見えたらしいんです。で、玄界島が大変みたいっていうので、誰かに無線が入って、すぐに戻ってきましたね。だから、この辺（地図を指しながら）、漁から戻ってきた人たちが救助してくれたんですよ、ここのおばあちゃんを。とにかく消防が来たら安全確認だけをしてってことで。公民館のほうにもリストはあるから。この人たちは上のほうにいるよ、とかですね。島でお世話をされている方たちが率先して（安全確認や救助を）されてたのは確かですよ。自治会長さんだったり、消防団長だったり、保育園とか漁協の支所長、支所関係だったりとか、そういった人たちが率先してされていましたね。結局、組合、自治会、消防、保育園…。やっぱり阪神淡路大震災の後だったので、意外と自分たちも気にしていたんでしょうね。

そういうところがやっぱりすごいですよ。島の人って柔軟性があるのかな。どこに行っても誰とでも仲良くできるし。それって私は島の特徴じゃないかと思うんですよ。マチに行くと誰とでもしゃべりよったら大丈夫よねって言われるけど、マチに行くと、そこはまたクルッと変わるんですよ。柔軟性が高いと思います。

島の人がいるから安心

（避難先の九電体育館では）固まってましたね、親戚同士で。私も兄夫婦がいて家族がいて、親戚の人たちで集まって。そのなかです。グループを作らないかんっていうことになって。ここからはここはAさん、ここからここはBさんよねって。そのなかで役割分担をしましょう、お掃除し

ましよう、調理のお手伝いをしたりとかっというように。東北の人たちを見ていると、すごく我慢強い、辛抱強いっていうか、あ、島やんって思うんですよね。

震災のときは、(福岡市)中央区のほうも震災になって、2日目ぐらいまでは外部の人が(避難所に)来てたんですよ。やっぱり外部の人たちが来ると安心感もないし。だから、玄界島が九電体育館に行き、かもめ広場に行くって感じなので。玄界島の人ただそこにいてことで安心感がすごかったと思います。

諍いがないことはないですよ。漁師はそれこそ働いてなんぼの世界なんですよ。漁師は早く漁を再開したいということで、まずは漁師の人たちをこちら(島)のほうに。仮設を作るときですよ。島のほうに100、かもめ広場(福岡本土)のほうに100で。

島はお金がかかる

玄界にいれば、私が遅くなって帰ってきても、食べる場所がないので自分で作らないといけないけど、(本土は)お金はかかるけど外食はできたからですね。そういう部分では助かりましたね。たまには食べに行こうって。

初めの頃は、あれも心配これも心配って。2年目になるとですね、いや、ここがいい、もう帰りたくないって。離島っていうのはすごくリスクが高いんですよ。時化になると学校は休まないかんし、いろいろな通い事、習い事をするのにも生活の物価が高いんですね。何をするにも、油が向こう(本土)だと198円だったのが、こっちだと500円だし。病院に行くにも1680円かかるし。足が悪ければタクシーだから。だから

身体を動かすのにすごくお金がいるところなんです。リスクが高いんですね。その反面、おいしい魚を食べられたり、山で(畑を)している人たちと物々交換だったり、とかお金が要らないんですけど。意外と自分だけではなんにもできないという部分では、近所づきあいをしないといけないので慶弔費がすごくかさむ。だから、いろんな面でお金がかかるんですね。

島っていうのは、僻地っていうところは農山村もそうなんだろうけど。マチに住んでて良いよね、買いだめせんでもいいし、仕事も、今日はちょっと歯医者に行きたいって言ったら、ちょっと早目に上がらせてもらえばよかったりとか、仕事にも全然支障をきたすことがなかったんですね。でも、島は何をするにも早くから出ないと、船の時間があるしですね。

だから、(本土の宅地である)アイランドシティに島の人たちの区画を作ってもらうのと、玄界島を復興するのはどっちがお金がかかりそうかって言ったんですよ。アイランドシティのほうがかからないんじゃないって言ってましたね。それもありがたねって。今から教育していく人たちは、子どもたちのお母さんたちは、たぶん照葉(福岡市東区)で大丈夫だったんじゃないですか。(島に戻ったのは)700人のなかで、今は500人足らずだから、やっぱり2,300人はいなくなっているの。

被災直後から博多での仮設生活にかけての住民の不安感、それが徐々に便利さに馴染んでいく様子、同時に生活の場に対する葛藤が芽生えたことがわかる。

人様のおかげ

(震災前の)私の家は人様のおかげで建ったんです。だからもう、嫌なことも言えないし。だって、いつ自分が迷惑かけるのかわからないでしょ。言いたいけど、そこは我慢して、いつか自分が迷惑をかけるかもしれないから。

建てる前は大変でしたよ。夜、仕事が終わったら砂を運んだりとか。家を解くときも業者さんに頼むんじゃなくて、島の人たちが家を解くために100人か200人がお手伝いに来てくれるんです。業者さんに頼んだら、業者さんのほうが下手で、島の人には器用よ、何でも。何でもできるよ。その人たちの昼ごはんを炊いて食べさせたりとかするし。家を解くのは1日で終わる。もちろん、後の砂とか整地には時間がかかるけど。朝から漁民センターを借りたりとか、賄いをするんです。魚を洗う男の人がちゃんといて、料理をする人がいる。

(手伝いに来るのは)島中よ。まあ、変わり者とか仲の悪い人は来ないでしょうけど、ほぼ来ますね。手伝いの人の名前を書きます。長老がね。動けない長老が。私の中には私の父親がつけてましたね。だいたいわかるからですね。あれほどこのあんちゃんかな、って言ってね。若い子どもやったら。紙に(名前を)つけたのをとりますね。お葬式で香典をもらったりとか、新築祝いをもらったりとか、(船の)進水で祝儀をもらったりすると必ず備忘録につけますね。だから交際費が要りますね。

賄いをして、またそちらが建てる時には行く。自分の身体で。新築のときはもちろん、お祝いとか行きますね。何回ぐらいかなあ、親戚の人たちはことあるごとに、

今日は基礎があるとか、今日は材木積み、今日は建前、とかですね。でも、もう今は車で、一斉に建ったし。前は人力よ。大変でしたよ。ここ全部よ。

人間一人じゃないし、やっぱり人様のおかげっていうのを肌身で感じたので、少しずつ自分が丸くなったのも感じましたよ。家を建てたりとか、母が亡くなったときもここまで花を運んだんですよ。だからもう、親戚の人は本当にありがたい。親戚のつながりは強いですね。だって、友だちは亡くなったときとかあんまりでしゃばらんですよ。親戚の人たちじゃないと、喪をかぶるのも親戚の人だし。

みんな葛藤した

私たちは70坪ぐらいあるうちで、もちろん100坪あるような人たちも、みんな変わらないような50, 60坪の土地しか買ってないんですけど、でも「今、自分が言ったら、人に迷惑をかけるよねえ」とかですね。だだをこねてる場合じゃないよねって。でも、本当はそれで良いのかなっていう、頭のなかでみなさん、葛藤されながら。で、一つになって今の復興があるんです。でも、果たしてこれで良かったのかしらねっていう自分と、ああ、これで良かったよねっていう自分とですね。思いますよ。前の家ときは隣の家のおじいちゃん、おばあちゃんが声をかけてくれたりとかですね。困ったり、元気がなかったりすると励まして「頑張ってるねえ」とか、子どもに声をかけてくれたり、とかですね。なんかおいしいものがあれば頂いたり、とか。でも、今の若い人たちは、そういうのはあんまりないと思います。今の時代ですよ。

復興を振り返って

やっぱり箱ものっていうのは、どうしても閉鎖してしまうし、隣と話すことがない。仮設のときは長屋みたいな感じだったんですよね。5、6軒あって、窓を開けるとお隣さんが見える。年寄りのためには長屋のようなところを作ってあげないと寂しいんですよね。長屋みたいなですね、(島の)西のどこか、アパートのところを長屋みたいな感じで。だって、もう一人暮らしの方ってバリアフリーで、ちょっとどうかあるときに誰かがちょっと連絡してくれるような人がいるっていうなら安心するんですけど。一人暮らしの方が多くなってきて、地震後にトイレで亡くなれた方がいましたよ、一人で、県営住宅で。若者の箱ものも必要だけど、老人のね…。今でも奥さんに先立たれたり、だんなさんに先立たれたりした人がいますよ。そういう人が気兼ねなく、シェアできるところっていいですよね。今はそういう案はないですね。全部建ってしまったし、空き地もないしね。

家や土地へのこだわり

息子も皆、島の外に出てるし。でも、家を建てて初めて復興よねって、自分の使命感みたいなものがあって、使命感で建てましたもんね。親が築いてきた土地や家っていうのは、うちは私よりも主人のほうが強かったですね。「長男の家やけん、やっぱり元々あったっちゃけん。家を建てな。親が持ったっちゃけん」っていうような感じでもんね。男の人のほうがそれは強かったですよ。女の方は、「もういいじゃないと、こっち(本土)でも」っていう人が多かったですよ。男の方は元々、家があ

ったし、先祖が持った土地やったけん、っていう考えの人が多かったですよ。(本土で生活するほうが)いずれは子ども孝行になるけん、いいじゃないとって、奥さんは言ってた人もいたんですけどね。

東北のほうの人って独居の人って多いでしょ。だからシェアハウスみたいな、長屋みたいなほうが寂しくなくていいんじゃないって、私は言いたいんです。

意外と引っ越してって労力を使う、大変なんですよ。年取った人はなおさらよ。いくらボランティアの人がお手伝いに来てくれるっていても、そこに住んでたら愛着があるし、そのものが増えるでしょ。私たちも2回、3回も引っ越したってでしょ。疲れますよ。大変だった。何が大変って、引っ越しが大変でしたね、一番。もう嫌ですよ。

5 語りに向き合う

これまで提示した語りには、土地や建物の整備といったハードな側面と共に、当事者にとっての内側の論理である、モノや空間に対する意味や理解が現れている。

住民が意識するもっとも大きな変化は、がんぎ段がなくなり道路が整備されたことである。住民の大半は、道路の便利さを語るよりも、がんぎ段ゆえの生活上の不便さ、それを象徴する家の普請の際の相互扶助、相互扶助を可能にする日常のつきあい、そして女性の身体への負担が一連のまとまりとして語られる。島で暮らす以上、がんぎ段を利用せざるを得ず、避けては通れない不便さの象徴であったといえる。ところが、その不便さは現在の道路の便利さとセットで語られるにもかか

ならず、その便利さゆえの負の側面、人間関係の希薄さが強調される。

住宅事情もまた同様の語り方になる。狭い島の土地に家を建てる時、分家は本家の土地の一角に建てるのが多く、自分の家の庭先だけでなく、本家をはじめとして他家の庭先を通して自家に行く、といった具合に、家と家は入り組んで近接していた。当時の暮らしぶりを住民が語る時、狭さのマイナス面ではなく近さのプラス面に話題が及ぶ。日常の助け合いだけでなく、家族内の諍いの抑制につながっていたことが指摘される。これらは、がんぎ段や限られた土地といった生活空間そのものが、家族や近隣、島全体の人間関係を維持し、暮らしやすいものにするために機能していたことを示している。

島の人間関係のなかでも親戚のつながりは特に強い。家の普請等の労働力の相互扶助といった側面だけでなく、死に際して共に「喪をかぶるのは親戚」という表現からも心的なつながりの強さがわかる。そのつながりが宅地造成の際の交渉に力を発揮し、説得に至り、短期の復興につながるのである。交渉の内容はもとより、どのような関係にある人が説得するのか、その関係を維持しようとするのか否かが重要であった。現地回復型の復興の場合、帰島することが前提となり、そこには旧来の社会関係の維持も含まれているとみなされていたからであろう。つまり、島の日常を支える社会関係だからこそ、復興を進める重要な資源となりうるのである。

宅地造成は玄界島の復興後の生活にとって、その精神的安寧さをもたらす重要な事柄を含んでいた。5か所の共同井戸にくわえ、各家の井戸を埋める必要があったのだが、その際に必要不可欠の条件として水神あげを住

民があげたことであった。それを単なる迷信として片づけるのではなく、福岡市も地元の論理に沿った対応をしたことは大きい。神仏に関する語りは、旧来の生活と新しい生活をスムーズにつなぐものであり、なによりも住民の心的な安定をもたらす要因の一つとなっている。これまで生活を支えてきた世界観が、新しい生活の保証となって住民を支えるのである。社会関係が復興を促進する資源とするなら、この神仏に関わる世界観の具現化は、復興後の生活を支える資源といえる。

仮設住宅の過ごしにくさもまた知られていることであるが、その狭さを逆手にとって、「なんにでも手が届く便利さ」「隣との近さ」として語ることもまた、現状の裏返しである。物理的近さを心理的近さとして語る時、疎遠になっていく住民同士の現在の関係を示している。同時に、生活基盤を回復した今だからこそ、過去の体験を整理し直し、プラスの経験として解釈し直し、新しい生活に向けていこうとする意志を認めることもできる。

その一方で、700人以上いた住民が復興後は500人台まで減少したことも事実である。震災以前から本土との心理的距離感が小さくなっていったことも影響しているだろう。パートとして女性が島と本土を往復し、若者も気晴らしをかねて本土で飲食することが日常化し、そのうえ、3年間の本土での仮設生活で味わう物質的便利さ、子の教育、親に気兼ねのない核家族の気楽さは、若い世代の家族にとっては魅力である。このように、被災は島の住民の生活場所を再考するきっかけともなっている。

6 おわりに

本稿では、震災前後の生活、震災当日、復興にあたってのやりとりを中心に語りを提示したが、玄界島の生活を理解するうえでは他にも欠かせない側面がある。住民の生活を緩やかに規制する信仰に関わる事象である。筏と西方丸を沖に流す盆の精霊流し、それを行う海辺に対する認識、不浄への対応と博多とのつながりといった一見ばらばらな事象が連関していることを筆者は滞在中に実感した。それらに関わる語りと土地や家屋の復興の語りを総合的に捉える必要がある。人の生活は目に見えるモノによってのみ支えられているのではなく、モノや空間に意味を与え、そこに自らを位置づけることで安心や安定を維持していこうとする不断の営みであると考えるとき、その過程を包括的に捉える意義は大きい。

謝辞

玄界島での調査にあたっては、毎回泊めて頂いている古嶋家の方々をはじめ、住民の方々から多大なご協力を賜りました。記して感謝申し上げます。

本研究は平成24年～平成26年学術研究助成基金助成(基盤研究C)「災害復興過程の地域的特質と

住民意識—オーラル・ヒストリーの実践的活用」(代表:中野紀和, 課題番号24520923)の助成を受けている。

注

- 1) 拙稿 [2014] において、復興後の島の空間的状况と復興を支えた地縁血縁を基盤とした社会関係についての概略を報告している。
- 2) 本稿のもとになっている資料は、2012年10月から2014年8月にかけて複数回にわけて行った現地調査で得られた資料の一部である。
- 3) 本稿で記録化した語りは、すべて事前にご本人に開示しチェックをして頂き、掲載の了解を得ている。
- 4) 市営住宅には、各階のベランダに外から入れる扉がつけられている。海士漁をする人が砂をつけたまま帰宅しても、家のなかに入らずにベランダから脱衣場に直接入れるような造りになっている。

参考文献

- 中野紀和 2014年「危機を乗り越える知恵—福岡県西方沖地震の被災地・玄界島の復興過程—」『経営論集』第27号 大東文化大学経営学会 pp.69-78
- 都市整備局玄界島復興担当部企画・編集, 2008年『玄界島震災復興記念誌』福岡市
- とうしんろく(東北大学震災体験記録プロジェクト)編, 2012年『聞き書き 震災体験 東北大学90人が語る3,11』高倉浩樹・木村敏明(監), 新泉社